

# 秋山清の詩の特性

— 秋山小論 3 —

## 錦 米次郎

私は先に三重詩人124集一九八五年に四十枚の秋山清論を書いた。が、これは秋山の人間個性の強固さに焦点をすえた人間論だった。かなりの枚数のその論とて、それが人間論としても血縁に不備の内容だった。で、発表後一部知り得たことを次ぎの三重詩人126集に「正誤と補遺」と題して若干訂正発表した。その124集の秋山論に引用した例詩は、秋山の人間個性に見あいこれを顕著に示している作品もだが、戦後の秀逸な反戦詩をもあげた。今回、これから書くこうとするものはその余の秋山作品の全体を見た上での、全作品の表現構造上の特性を見てゆこうとするこれは表現論である。秋山作品の総合的な特性は、ほぼ左にあげる箇条の中にくまれている。

- (一) ひらがな多用の文体。短歌との関わり。
- (二) 花木草等植物名が作品上に頻出する。
- (三) 表現方法。
- (四) 現実をして語らせる即物主義リアリズム。

口、詩集ある孤独、朝にかけての団集にあるモノローグ。

(四) 詩の背後のアナキズム。  
以上、四つの特性の中には詩集解説者木暮眞人の——自我への対決、及び内村剛介の孤独孤立なストイックも又ふくまれている。

以上の分類にはそれと明らかに判読できる作品の反面、相互に混合作があり見分けもむつかしい。まずは、ひらがなの文体例からみてゆきたい。

ほたるの会話

ピカッ ピカッ ひかっているね。  
ひかっているときもとんでるね。

ひかるときとひからないうときと  
どっちがながいだらうね。

草にとまっていたるときも。  
そらをとんでゆくとときも。

さびしいんだらうかね。

それでひかるんだらうかね。

— 後略 — 三重詩人九集、一九五一、七

この詩は朝鮮戦争時代の状況の中での、作者内面の形象化と情況批判と思想主体とを、秋山は螢の生態で童話風に優しくダブルイメージにのせたものとおもう。とするこの詩は秋山と小野十三郎らが主力の、詩行動の時代の詩論、現実をして語らせるとの方法論に即して書かれたものである。

詩行動という雑誌は、一九三五年三月清水清の編集発行で全七冊が出された。

この「ほたるの会話」には、特にひらがなが意識して多用されているがその他の詩篇にも全体として秋山作品には、ひらがなの使用の頻度が一見して目につく作品が多くあるようにおもわれる。この秋山作品におけるひらがなは何に由来するのだろうか。私はそれが抒情詩における情緒に深く根ざしているからおもわれ、この情緒はまた秋山の短歌とも関わっておりこの問題は後段で考えてみたい。次ぎにもう一つ、長詩の前部分を引例したい。秋山清50才の處女詩集、「象のはなし」からだ。

## 雪どけ水

つもった雪がやせほそる。  
とけてながれる。じくじくに  
どろどろに とけてゆく下から 馬の糞だ。  
にわたりの糞だ。吐きすてた青った痰だ。  
ふみつけられてかわいたものが  
ふくれあがってとけてしみでる。地べたい  
ちめんの  
どぶどろのたまり水。  
ああ たとえようもない。  
さげずみの言葉よりも 恥しらずのいいわ  
けよりも。  
とけて ながれぬ ぬかるみの むざんな  
色と悪臭だ。  
ものがとがくずれるときの  
とけてながれてゆくはやさ。  
どたりどたりと音たてて  
屋根からずりおちてくるいくじなさ。  
いやいやながらとけてくずれる地べたいろ  
のずぐろさ。  
汚わいの水となり  
どぶどろとなつてながれもせぬ。

夕ぐれから夕ぐれまでの二十四時間。  
世界をおしついでふった雪は

零下十度の冬をもってきた。

ふりつもった雪はきしみながら凍てついた。  
足あとも。流れの小みちも。

雪と水の白いちめん。

きびしい寒気は  
墮らくも 腐はいても 人々の目から遠ざけ  
た。

権力のようにひたかくした。かくしおおせ  
たとおもっていた。

かくしおおせたその時間を  
三千年などと途方もない。  
うつくしい雪景色も もうじくじくのぬか  
るみだ。

なんでもありはしなかったのだ。  
千木とかつお木の社殿のおくの、たれさがつ  
たミスのくらすのなかに

天からやってきたのだという。  
あれは伝説ですらもなかったのだ。  
二度と天にかえれない。

いきたなく地べたにはいつくばった雪どけ  
水のどぶどろどろ。

自分だか 他人だか。  
神だか 人間だか 元締だか 人身御供だ

か。  
わたしはただの水でした。雪どけのたまり

水。

天や神とは何の縁故もない。

人間だったのです。正真正銘。

そんなことをいって中折帽子の角をつまん  
でふってみせながらおりました。

そらぞらしいノリト。ゼスチュアよ。

— 後略 —

長詩だ。じつに息の長い100行近い力作だ。この雪どけ水の主題は、かつて皇統連綿三千年とも声高に崇めさせた天皇の素顔の暴露と、これを支え強制した権力と信じこまされた臣民国民なるものの汚れた俗衆の厚顔の顔々その習俗をも、ひと冬のとけてよどみ流れまた蹲る穢ならしさの雪にみだてて、そこには表皮だけの民主主義、天皇も国民も同根同色のどぶどろ水しかないこのわが風土のぬきがたい封建の遅れへのいらだたしさが、この長詩の批判の中心主題のように読みとれる。この詩の批判は先ず秋山をもどろどろにしたが故に、読者にもそれだけつよい返り飛沫を引かける切実さにつらぬかれています。

これはまた単に、天皇や俗衆への封建制批

判ではない。天皇も一人の人間。然も制度にのっている人間に過ぎない。だのに敗戦してもまだこれを象徴として法制にのせなお崇拝と尊厳とを強制強要してくる国家権力へのアナキスト秋山の強烈な、しかも根源的なアナキズム思想からの国家解体のおもいもこの作品にはつよくこめられている。

先の例詩、ほたるの会話と前掲の雪どけ水の他にここには引用しないが、一九六六年コスモス社刊の小詩集「白い花」もまたひらがな多用の作品集として指摘するだけにして枚数制限もあるので先へ急ぎたい。ではなぜ秋山作品には、ひらがなの使用が多いのかを私は次ぎから考えてみたい。

秋山清は、ひとも知るように、一九六三年に三一書房から短歌入門を出しているし、一九七七年にはたいまつ新書の「啄木と私」も出して、啄木の歌への評価を語っている。その上に昨年一九八四年に自分の歌集「冬芽」をも山崎書店から出している。秋山の短歌入門は手許にないので彼がその本でどういう論を立てているか今不明だが、たいまつ新書の中では短歌、しかも啄木の歌への彼の意見があるのでそれが大きな手がかりである。

このたいまつ新書の128頁には伊藤信吉との

対談があり、そこでの秋山の発言が彼が自己の詩の表現にひらがなを多用することの、意識的あるいは無意識的な短歌への好感の自然な発露を、語っていると私には想像される。

伊藤信吉は「啄木を読んで何に引きつけられたか、それはセンチメンタリズムだ」と語る。秋山もまた「一握の砂のセンチメントは大変好きだ」と応答する。両者意見は一致した。そこから「啄木、白秋、牧水らはセンチメンタリズムによって自己を確立した。センチメンタリズムは非詩との考え方は間違っている」と伊藤はいう。秋山はそこで「我が意を得た発言だ。伊藤君も抒情小曲論を書いたが、ぼくも三一書房の詩入門で「抒情小曲」を論じた。抒情とか抒情詩を頭から馬鹿にしてそれで新しい詩の世界に行きつれると思っている人が多い。ぼくはむしろ忘れてしまっただけだ」と考えている。センチメンタリズムを忘れてしまわねば詩の書きぬような人は、ぼくは大きくなれないような気がする。それから二人の話は、乃木大将の（山川草木転荒涼）の中の戦争の悲惨、生命の惜しさに移り、啄木が一握の砂から、悲しき玩具へ移行して行った思想的な内質と現実認識の広く強烈になった点をあげる。そして二人は結

以外のものであることはむずかしい。詩が詩としてあるためには、詩人自身の内なる思いを述べるというこの他に何があるろう。この秋山の意見は抒情詩へのものだが、ことを抒情にしよればこれは短歌も同じである。自己の心の内なる思いは、詩も歌も根は一つだ。だが、型式は明らかに違う。短歌は五七五の定型とリズムを持ち自ずから自由な詩とは違う約束がある。最も自由な詩人とおもえる秋山清があえて定型の短歌を選ぶ自由には、私はこの詩人の好みが先ずあるとしたい。その上で考えられることは、短歌の抒情の中味である情緒への愛着が秋山をして短歌に向かわしめたのではなからうか。抒情とは先に啄木を論じた伊藤、秋山対談でのセンチメントを含む人間内面のひたむきな心情のリズムである。短い型式の中で、それが思想性も広く社会性をも内包して直截に表現できるということ、秋山はその自我の確立の姿をおのれの短歌によって立証してみせたのである。論を一応おいて、先ず秋山の短歌を歌集冬芽の中にみてみよう。その一時の思いたえかねて行く街の見上げる並木に冬芽あからめり生きてこの冬をつらぬかんのみむしる春の

来たるを思うべからず  
冬芽のごとくしずかに耐ゆるべし黙するこ  
とも今はたたかいなり

去年十二月の中日新聞に伊藤信吉の「鬼籍の詩人」が連載され、伊藤は辞世の詩か？と秋山の二行詩を載せた。私はその詩の出所に不審を持ち、暮尾氏に尋ねたりもしたがやとそれが詩ではなく短歌の二行書きであることが、歳明けて一月二十一日の秋山追悼会で暮尾氏に歌集冬芽を渡されてはじめて判然とした。その短歌も冬芽には出ていた。

陽は正午にありてわが影短し、風は突風となりてわれを吹きまくる

伊藤信吉の二行詩では最初の字句が、一空にありて一となっていて「正午」とでは私の写し違いではなかったか、ともおもわれる。

以上、歌集冬芽から随意にのせたがこれらの歌はみな一九四四年の作である。これらの短歌の抒情の内質その情緒は、当時の翼賛会発行の詩歌集の軍国礼賛と比べると、純粹なまでに反戦反体制の自我の強い意志に貫かれていて、短歌の型式をとってはいるが詩として読まれて遜色はない。

引用の詩、ほたるの会話にしても、雪どけ水にしてもそれはひらがな多用の表現構造で

論的に、短歌の持つ抒情が社会的な大きな広がりを持ち、それが思想性の確立にいたる点を論じてあっている。

そこで、秋山清の詩入門に移って彼の抒情小曲への考えを探ることにしたい。秋山は抒情小曲を書くことをすすめることの理由の根本は、それは自我の問題を考えることだという。小野十三郎の短歌の抒情の否定は秋山も賛成だが、抒情の中味としての情緒そのものの否定とは秋山はおもわぬ。抒情の過剰を制して現代詩に分け入る自我をわがものとなし得るためにも、情緒に溺れてみる必要があるはしないか。これが秋山の抒情小曲への基本的な考えのようだ。

私の考えるところでは、小野も抒情の全否定をいったのではなくて彼の詩論では彼は抒情の底に批評の鎌を、といったのだったとおぼえている。そうすると伊藤、秋山の対談の結論も言葉は同じではないが落ちくちは同じところになっている。然し、これでは秋山にとってなぜ短歌なのかの根本のところは判らない。秋山は同じその詩入門の抒情小曲の章の冒頭でこう書いている。

「現代の詩といわれてもその内容と型式とを通じて、それが表現し得る限度は詩人の心境

あった。また詩集象のはなし、白い花、ある孤独、それに朝にかけての団欒にしても秋山作品には全体的にひらがな多用の表現が頁を開けばすぐ目につく。私はこのひらがな多用の表現に至る秋山の詩技術の根に、情緒への彼の愛着が大きく比重を占めているのをここまで見てきた。だが、まだ結論には早い。

戦後のリアリズムの詩の目ざましい技術革新を果たした詩人に、小野十三郎を上げることが出来るだろう。私は、秋山清における作品のひらがな多用も彼の抒情詩へのそれが技術刷新の寄与だととらえたい。近現代詩を通じてひらがなの有効使用の実験例は他に沢山あり、ひとり秋山だけにその技術が冠せらるべくもないのは勿論である。だが秋山の場合にはそれが一時の思いつき、気まぐれによるのではなくして、抒情の内部の情緒の析出の論理的な把握のもとに、できるだけ漢字を避けやわらかいひらがなの多用をともなって作品構造上の位置を占めている点に、彼の表現の全体的な特性があると私はとらえたい。勿論、これが作品の主題とその対象とによって、選ばれて頻度の多寡が見られることはいうまでもない。

ことを秋山の抒情詩の技術刷新に目をむけ

れば、私には詩集ある孤獨一九五四—六七年と同じく、一九七二年の朝にかけての団欒のモノローグが、ひときわ注目される表現だが、これは他の花木植物の歌いこまれた作ともあわせて他日に期したい。

それと最後にも一つ、もっとも重要な作品表現に立ち向かうときの秋山の基本的な主体の姿勢、その方法とを書いてこの小文のまとめとしたい。それは自伝、昼夜なくの山羊をやめるの章の155頁に、詩誌弾道を回顧した言葉としてある。

そこでまず秋山は、「詩は自分のために書く」といい、さらにこれを素朴に理解するために「詩は伝達を目的ではなく、叙述を目的とする」と補強する。だから「詩は政治的な伝達や宣伝のために存在するのではなく、わが思いを述べるものでなければならぬ」ともいう。

以上をこの小文のしめくりとすれば、秋山作品の特性の見かけとその中味のところは不充分ながら語れたか、とおもう。

※この小論は一九八六年三重詩人20集発表のものに今回、若干の訂正、省略、付加等をして暮尾氏のすすめに応じたが、その結果は注文よりも枚数がのびた。一九八九、六月。

いような方向をとって行くことは……日本の言葉を相当革命する一つの手段になる」と主張する。「言葉とか文字の使い方というものがイデオロギーと切り離すことの出来ない、じつに密接した問題」だと考える秋山は、「われわれにとっても文字の制限はたしかに苦しい。だが……新しいカナずかいと漢字の制限は日本の文化が革新されるに第一に必要なことだと思ひ、苦しさを忍んでその方向に進みたい」とのべる。

次に秋山は、口語か文語かの問題をとりあげ、あくまでも口語で詩を書くことを主張する。「われわれの生活とか文化とかいいうものと言葉は表裏一体というよりも、もっと密接なもの」だから、「僕たちが本当に普通に話す言葉、そういうもので僕らの詩が出来なければならぬ」と思うのだ。「近代詩を語る会」の出席者の中で、秋山は北川冬彦とともに「もっと強く口語詩を主張している。そして、「文語は一切使わんというところからやっけていく方が……いいんじゃないか……。文語でやれば殊に七五調などは非常に出やすいが、そういう出やすいということではなく、僕はどんな苦勞しても口語で書こうとする」と言い、「生活のことばと、詩のことばが合

## 秋山清と詩のことば

羽生 康二

秋山清の詩人としての活動は大正時代にまでさかのぼることができるが、かれが広く注目を集めるようになったのは、今から四十年前の第一次「コスモス」のころからだろう。その時期の秋山清をなまの形で知りたいたいと思つて、第一次「コスモス」復刻版十二冊を読んでみた。かれの発言は、詩人の戦争責任の問題と詩のことばの問題に集中している。戦争責任の問題はこれまでに何度かとりあげられているので、ここでは、詩のことばの問題をかれがどう考えていたかをみてみたい。

秋山清がことばの問題にふれているのは、創刊号の「言葉についての感想」、五号の座談会「近代詩を語る会」（出席者、金子光晴、小田切秀雄、岡本潤、秋山清、北川冬彦、村野四郎、壺井繁治）、六号の「詩のながきについて」（署名は高山慶。秋山は高山慶太

致して美しくなるような方向が出てこなくなはならぬ」「なるべく日常語で詩を作るということが僕たちの詩の新しい格闘の場面になる」と言う。

新かなづかいを使って口語で、という原則に立って、秋山清は詩を書く際にどのような手法をとったか。座談会「詩の言葉の美しさについて」の中で、秋山はそれを具体的にのべている。整理すると、①名詞以外はできるだけかなで書く、②ことばを簡単に単純にする、できるだけ圧縮してことばを少なくして表現する、③観念的な漢字や熟語の使用をさける、④一行でひとつのものの意味が終わるようにする、⑤五七、七五とかの調子のいいことばは使わない、⑥形容の少ない表現のリアリズムをめざす、ということになる。

「言葉についての感想」の中で、秋山は、「私は言葉について多少の潔癖をもってゐる。詩を書くに当って苦勞するのは、つい調子などにだまされて、心にもない言葉を使ふやうなことがあって、後になってさういふところを発見すると、非常に自分に対して不快である」「絶対に人の真似をしないことである。自分の言葉を使ふことである。形容詞を用ひないことである。副詞を過多に用ひて仰々し

郎という名前をよく使った）、七号の「文字と言葉」（署名は高山）、十号の座談会「詩の言葉の美しさについて」（出席者、栗林農夫、岡本潤、久保田正文、壺井繁治、秋山清）の五つ。

そのころは第二次世界大戦で日本が負けてからまもなくの時代で、新かなづかい当用漢字が実施されようとしていた。文学関係者の多くがそれに反対する中で、「コスモス」の詩人たちは賛成する立場をとった。秋山はその先頭に立っていた。

「深い思索と情感によって貫かれた文章は……悉く難解なものとするべきである。精神の限りなき苦勞を前提とするものなのだ。私の俱れるのは漢字制限や新仮名づかひが、わかり易くといふ功利的な啓蒙意識によって、精神の苦勞を省略し、精神を衰弱せしむるやうな結果をもたらしはせぬかといふことである。精神の貴族と精神の奴隷と。詩人はこの階級闘争における闘士でなければならぬ」（亀井勝一郎「言葉のいのち」、『至上律』一輯一九四七年七月）。このように、新かなづかい当用漢字をただの便宜主義と考へて反対する人々とは逆に、秋山は、「私は新カナづかいと共に、なるべく制限漢字以外を使わな

い表現をしないことである。内容をぢかに捉へて、それをそのままそこに据へたやうな言葉によって……詩が書けないものだらうか」とのべている。これは前記の①⑤⑥を別のことばでのべたものと言つていい（この文章は旧かなで表現されている。新かなづかい実施前だったためだろう。）

④の一行で意味を終わらせるといふことについて秋山はくり返しのべているが、それは「一行で言えることを三行、三行に分けたり、くりかえしを用いることは味嘆になりやすい……一行一行の言葉とか一連とかいいうものは出来るだけ圧縮するという方法」をとっているからだ。また①と③について、かれは、「言葉を単純にし、かなとゆう音標文字で表現することは詩の内容を豊富にし、新しい言葉の韻律の問題にも触れることである」「熟語などはかな書きでゆくと、さっぱり意味のわからないものになることが多く、したがってかな書きでよく理解されるためには、手慣れた漢字や熟語のかわりに、余程うまく日常の言葉を使いこなさねばならない」と言う。そして、「自分で詩を書いて現実的な表現をするためには、観念的な漢字や熟語を使うよりも……それを避けるべきだと思う」とのべ

る。この考えは⑥の表現のリアリズムにつながる。またそれは、日本と言わずに「瑞穂の国」と言ったり、晴れわたった美しい空を「スメラミクニの空」と表現したりした、戦時中のことばへの批判とつながる。

秋山清はそのころどんな詩を書いていたか。

レールと枕木に

雨がしよばしよばふっている。

溝つぶちの砂利のうえに

ころがったくろい生首。

口をひんまげて

うす目をひらき

頭はつぶれ

満員の急行電車がとおると

赤っ毛が風にゆらゆらした。

今朝までは

生きていたいのち。

連結からすべりおちたのか。

死体は赤靴をはき

半町ほどはなれたところで

おおむいてはいる。

『コスモス』三号（一九四六年九月）の「首」全編（発表時は旧かなづかい。引用は現代思潮社の『秋山清詩集』による）。秋山は、小野十三郎などの影響をうけて、その十年ぐら

い前から「現実をもって語らせる詩」を試みていた。作者の感情をなまのまま表現するのではなく、現実の事象をそのまま提出することによって強い現実感を生みだそうとする。「首」はそういう手法の典型的な実践例だ。名詞以外はかなを使う、一行でひとつの意味を終わらせる、形容詞を用いないなど、前記①②③の手法が忠実に実行されていることに注目してほしい。

一九〇七年の川路柳虹の「塵溜」以降、口語詩は八十年の歴史をもつ。詩のことばとして口語を使うことはあたりまえのこととなっている。が反面、口語への不信感をかなり多くの詩人たちがもっていることもまちがいない。飯島耕一は、昨年十月下旬の読売夕刊での岡井隆との往復書簡の中で、その不信感を「ノビきったゴムのような方法意識」ということばで表現して、詩人は定型への意志をもつべきだと主張している。また、昨年文語詩集『円き広場』をだした清岡卓行のように、文語で詩を書くという時代錯誤の試みをする詩人もあらわれた。

口語への不信感のことばへの不信感と大きな関連があるだろう（現在の人々がことばへの信頼感を失っているのは、人間の存在感が

希薄になってきたこと、ことばによる訴えかけの空しさを現代人が痛感していること、そして何よりも人間への信頼、人間であることによるこびをわたしたちが実感しにくくなっているところからきていると思う）。ことばへの信頼感をもちにくくなった詩人たちが、日常のことばである口語、多くの場合ダラダラしてしまりのない口語に不信感をもつのはふしぎではない。だが、いかに不信感が強いとはいえ、口語は日常語以外にいったいどんなことばをわたしたちは使えるのか。

今必要なのは、日常語を使っていきいきした美しい詩を書こうとする努力である。四十年前に秋山清がやったような詩を書く上での努力——なるべく形容詞を使わない、名詞以外はかなで書く、ことばを単純にするなどのような具体的な努力——を詩を書く際にすることである。秋山の「首」には無意味な行、むだなことばはない。どの一行をとっても、はっきりしたイメージを結び、それぞれの行で意味が完結した上で次の行にひきわたされている。それらが集積して「首」という詩を形成しているのだ。

秋山清のそういう努力が結実したのが『象のはなし』をはじめとするかれの詩集である。

かれの詩ほどの詩も手がたくリアリティに富む。が、わたしが不満なのは、かれの詩に読んで楽しい詩、美しい詩が少ないことだ（かれの詩にはユーモアがあるから、ある場合には読んで楽しいけれど）。「首」は「現実をもって語らせる」というかれの方法が生んだリアリズムの詩であるが、「現実をもって語らせる」方法以外にも、さまざまな方法が考えられるはずだ。詩人たちは、四十年前に秋山清が到達した地点をこえて、楽しい詩、美しい詩を書かなければならない。そういう詩を書くための具体的な方法の試みをしなければならぬ。

## 庶民性からの脱出

— 秋山詩についてのメモ —

高島 洋

秋山さんに私をはじめでお会いしたのが、一九五六年であったように記憶している。そ

の時、どのような要件で上京したのか正確には覚えていないのであるが、とにかく秋山さんと同行して高田の馬場のお宅にお伺いし、一泊させてもらった。そしてその時いただいた本が「文学の自己批判」であった。翌一九五七年たまたま私が鉄鋼労連の中央執行委員として赴任し東京に住むようになり、その後一年間滞在したのであるが、その間は秋山さんからよく電話をもらったりして度々お会いすることができた。そのころ秋山さんは新日本文学会の役員を辞められ、なんとなく寂寥の期間であったように窺われた。従って私がこのころの秋山さんを想い起こす時、なぜか詩集「ある孤独」の諸作品が重なって映ってくるのである。

ところで「詩は自分のためにかく」というテーマについては秋山さんがもっとも主張したところであったようにおもう。この度「秋山清全詩集」をよみなおして秋山さんが何を自分のためにかいてきたのかを考えてみる時私はやはり秋山さん自身の「庶民性からの脱出」であったようにおもう。「庶民性からの脱出」という場合、内面からと外部からの双方を同時的に考えてみなければならぬ。ところでその前に秋山さんの民衆観らしきもの

をその作品を通して見ておきたい。「大石原」という詩がある。それを記してみる。

大石原

とおくひいていった

干潮のあとの石原の

ごろごろ石の無言のつら

はなしあうこともせぬ。

自分だけ物たりている無表情。

日の当っている方はしろく。

かげっている方はくらく。

むきあってながら

そっぽをむいて乾いている。

だまってごろごろしているのが

ただ一つ安全な処方みたいに。

大石原を風が渡る。

磯くさく夏のまひるの風。

大声をたてるなよ。

大声をたてても返事はないぞ。

ぬれて、かわいて

まるっこく角がとれて  
千年万年このままで。

まるっこく角がとれて、千年万年このままである石ころのその一つは、じつは民衆の中の一人である秋山さん自身でもあるのだ。従ってこの場合、庶民性から脱出しようとしてでき得ない秋山さん自身の自己批判と見てよいのではなからうか。

更には「美術館の裏手」という作品を記す。

### 美術館の裏手

なで肩で

ふとっているのは大山さん。

やせていかつのが山県公か。

上野美術館の裏手で見かけたときは

二人とも馬に乗って向うむき。

前にまわってみれば

果たしてその通りだ。

ひげのある山県。

ひげのない大山。

参謀本部前にいたときと

おんなじ姿勢だが

さっぱりお人好しになって

山県の肩には子供がはいのぼっている。  
それにしても

予期せぬところに

向うむきに立っているのをみて

すぐそれとわかったには少々てれる。

ぼくは

日本陸軍の巨頭とこんなにもおなじみだったのか。

この詩においても秋山さんは、自己の幼いころからのなじみである陸軍の巨頭との同化を鋭く自己批判しているのである。要するにおのれの内面の庶民性をとり払おうとするものであろう。

更にもう一つの詩を紹介しておこう。次に記するのは「やさしい心」という詩の後半部分である。

ぼくははつきりわかっていた。おれはひとりだ。

はればれしいおもいがどこかにあった。

ぼくの目がそっちにむくと

ひとびとは顔をそむけた。

ぼくの額と鼻のなから血がながれ

顔はくろくはれている

これくらいのことかとおもった。  
やつらの暴力というもののささやかさを

もいながら

ぼくはたちあがった。

やっと立ちあがってすこしづつ歩もうとした。

息をしずめて、まっすぐに進もうとした。

とりまいたひとびとが囲みをひろげ

ぼくのまえに野原と丘と

すこやかな人家と工場のけむりと

まだ高い秋の陽があった。

ぼくの足は街にむかっていた。

自分ではないように、ぼくはやさしい心を

抱いていた。

この詩は秋山さん流に、孤独をむしろ誇りとしつつ不調(不服従)の世界を表現したものであろう。

これら三つの秋山さんの詩を総合してみると次のような図式が成り立つようにおもう。

おのれの内面の庶民性をとり払う

自我を守る

孤独

### 不調

非暴力としての不服従

秋山さんが常に主張していた「詩は自分のためにかく」という回路が成り立つようにおもわれるのであるがどうであらうか。秋山さんにとって詩とは他人を説得するものではなく、自分自身に対するあくことのない追究であり、たしかめであったと言いだらうか。

## 秋山清の短歌について

坂上 清

「歌集が出たよ」と、秋山さんから歌集『冬芽』を手渡された。「僕のだよ」といわれて、私は「へえ!」と思った。今さら短歌などを、という思いがしなくもなかったのである。一九八四年六月二日、長谷川七郎さんの詩集『季節風』の出版記念会が、行われた

席上のことであった。「私にもそれはおかしい。秋山清の短歌なんて。しかし私は今さらでれたりほしくない。誰よりも自分のこと、自分がどんなつもりで自分を信じ、時には軽んじもして生きていくかを、時折考えて来なかった自分でもないからである。自分と向きあった自分自身を批評できないほどの、思いあがった自分でもない」と心得ているつもりだ。」秋山清さんは歌集『冬芽』のあとがきでこのように述べていた。一九八八年一月一日に永眠をする四年前のことであった。

歌集『冬芽』は短歌一六八首、長歌一篇が収められている。作成年代別に見ると、一九二二年の中学生頃までが二五首、一九二三年上京してから一九三一年までが三二首、一九三二年から一〇年間は作歌なしで、一九四二年からは敗戦の一九四五年までの四年間が一〇三首である。敗戦後は一九五九年、友人の追悼の歌など八首あるが、作歌活動は止めたとみてよいように思う。一六八首の歌は「あの頃の歌」「幼いうた・他」「さい後の歌」(以降三つの部をI・II・IIIと呼称する)の三部にわけられ、各部とも作成年代別にグループにまとめられている。グループに標題はつけられていないが、連作には後に標題が小文

字で表示されている。「短歌は一首に独立してこそ現代の詩といえるのである。」という秋山の考え方によるものであろう。I部の「あの頃の歌」(I)四六首は、一六八首の中から気に入ったものを選んだと考えられる。それは七つのグループにわけられ、その中の一つが連作△冬芽▽で、歌集の題名にもなっている。「幼いうた・他」(II)は六六首で一二のグループにわかれ、初期の作品を除いて、△子つばめ▽、△雁太郎▽、△群馬山脈▽、△艦載機▽、△早春▽、△五分ノ二▽と六つの連作をあつめている。「さい後の歌」は五六首、さきの二つの部にもれた歌と長歌一篇で、長歌も含めて一四のグループにわけられ、一九五九年の八首も入っている。

秋山清は、短歌との出逢いについて、中学三年頃で石川啄木や北原白秋を知ったことが、短歌を親しみぶかきものとするに役立った、また若山牧水の『和歌講話』などを読み与謝野晶子や土岐哀果の短歌も知ったが、とりわけ啄木には自分の思いがそこに歌われているような気がして、親しめたといっている。

啄木の歌集を読み、午睡から覚めて見る大空の雲の黒さかな

Iの部の冒頭にある一九三二年の作である。

少年の不安な気持ちがよく表現されている。五・八・五・十・八の三十六文字で字余りである。三十一文字にこだわるなら少し手を加えれば、定型に収めることはた易い。敢えてそれにこだわらないところが、秋山らしきではないかと思うのである。ここでは一九二二年前の作は一首だけであるが、Ⅱの部に二四首のついている。次にその中から数首を抜き出してみた。

高々と高原のごとき黒雲の西に積もりて冬の東風吹く

木枯に落葉落つるときはさびしくも夕べに聞きね山寺の木魚

あてもなくさ迷い行けば冬の野に黒き小鳥の鳴かず歩めり

踵の高い靴をはいたる女学生ら電車にさわぐ我頭痛き日

三月に落第をした級友に隅で新聞を読む人が似る

黒板の禿げた跡はものさびし鉄道案内の台湾に似る

海棠が半分散って咲いているペンキの禿げた教室の横

学生時代の青春の感傷がほのかにつたわってきて、幼さの中にもしっかりと対象を見つ

めているものもある。二四首の中、八首が字余りであり、終わりの四首に見られるように口語の短歌も作っていて、定型の中で比較的自由に詠んでいる。

一九二三年四月に秋山は上京し、日本大学予科に入学、関東大震災にも遭遇するが、ひとり暮らしの寂しさを歌に詠んでいる。

古里の母にたよりに書きし夜の柿の葉に降る雨なりしかな

風百里いずこよりかは知らねども秋立ち初めて青葉が鳴れり

暴風の来たるうわさを耳にせし夜の外面のしずかなる闇

暴風の来たるを待たむ心地にてしずかに床を延べにけるかも

暴風のついに来たらず朝明けぬ熱きばかりに秋の陽の照る

暴風の歌三首は『短歌入門』でも紹介されている作品で、そこでは「台風」となっている。Ⅰの部に収録するとき「暴風」に手直しをしたものと思われるが、私は「台風」の方がよいと思う。台風が来て暴風になる表現が普通のようなのであるし、一番後の作品の場合、台風の表現のほうが、より歌の内容にふさわしく現実感が強いように思うからである。

二年後の一九二五年には母も上京し、秋山は東大久保に住む。ながい失業の時期で、東京に生活して田舎ぐらしが恋しくなった、そんな短歌を書いている。現実の生活がその程度にしか、そんな風になか歌えなかったというのは、作者の人間の弱さをあらわすことである、と秋山は『短歌入門』で自作を解説している。Ⅲの部から当時のいくつかの歌を抜き出してみよう。

ふるさとに盆踊りする頃となり窓に大きくお月さまが昇る

年二十三ビールを飲めばふるさと盆踊りのうたをうたい出ずるかな

ふるさとに海は秋の風吹くならむ母もその音をきいているならむ

かえるといえは喜ぶだるう母の顔を思い出して締める夜のガラス戸

秋草の花さく十月あひの丘の山を思えば海も見えてくる

『昼夜なく』の自伝によると、秋山の詩人としての出発は、日本大学予科の教室で斎藤峻を知ったことである。彼の影響をうけやがて同人誌で詩を書きはじめ、思想的にはアナキズムに傾斜していくのである。プロレタリア詩のさかんな時代で、社会的現実のなかの矛盾

盾や不合理を突く詩を書くための方法を求め、それには抒情的な発想と絶縁しなければならぬと考えるようになった。秋山は『短歌入門』で、「それは相当苦しい作業だった。それには叙述よりもっと現実的、写実的な手法を追ったわたしは、短歌では逆にずっと自由な、抒情的にうたいまくるやり方をやっていいのだ、ただしそれは自分一人の心の慰めにしかならないもの、それでもいいとおもった。こういう短歌の考え方はわたしの詩のための安全弁となるものであった。」と思想と詩の方法について考えあぐんだ当時のことを述懐している。

ポツと一つ桃いろの花が咲いている夜のテーブルの口欠け花瓶

一輪さした花のもも色名をしらず四五日過ぎてややしおれけり

大根と牛蒡と赤い人參とふところに入れて坂を上りぬ

心にたまるこの重たきものは何ならむ秋ぞらは遠く晴れわたりたり

誰彼に親しくなつて角のとれた自分になつてはならぬと思う

この日ごろ胸にわがある思いなどその解けざるを良しと思えり

しかしこれらの歌をみると、抒情的にうたいまくるといってはいるが、詩の方法論に目覚めることによって、歌も写実的な表現となっている。思想的にも確かなものになっていくに従って、やがて歌から離れ一九四一年までの十年間、歌を作らなくなるのである。昭和は一九二九年の世界大恐慌から、二・二六事件と軍部系勢力によるファシショ化が進み、不幸な十五年戦争の時代に入るのである。

秋山清の初期詩集『豚と鶏』は歌から詩への時期のものである。一九二四年〜一九三四年に作られた作品が年代順に載っている。それを読むと、秋山が歌から離れ現代の詩を獲得していく過程が、作品の変化に読みとることが出来る。一九二七年作の「波」の詩あたりから短歌性がふっきれている。

一九三二年から一九四一年までの十年間、秋山は短歌を作っていない。秋山が再び短歌を作るのは、太平洋戦争が始まった翌年一九四二年から敗戦までの四年間で、一〇三首である。この頃は既に秋山は詩の方法論を確立し、戦争の重圧に耐え詩作を続けていたのである。『昼夜なく』で、「丹沢（明）は小野（十二郎）の作品の中に文学の抵抗を発見し、『現実をして語らせる』という、戦時傾向的

弾圧への方法に気づいたのであった。私自身のためにはこれ以上はなかった。私の詩の手法ははからずも抒情的から写実的に転向しつつあった。戦後『白い花』にまとめられた写実的な詩は、このいきさつの賜である。」と語っている。

Ⅰの部に収録されている短歌は、一九四二年作、一九四三年作いずれも六首、一九四四年作は四首と七首の二つのグループにわけ一首、一九四五年敗戦の年は六首である。一九四五年の作品は家族を対象として詠んでいるが、あとの短歌はすべて風景にモチーフをとっている。戦時下でありながら、その気配は感じられない。わずかに

山路行くトラックは兵を満載しこの秋ぞらは時雨たりけり

と、一首だけが戦時を象徴しているといえようか。これららの歌の中で、一九四四年に作られた『冬芽』の連作が、その時代の背景を考えると、戦時下の苦悩ときびしい重圧に耐えながら生き抜く決意を、厳冬に春を待つ並木の冬芽の生命力に思いを託し、へ今は沈黙することもたまたかである、と戦時下の抵抗を歌っているのである。その一時の思いたえかねて行く街の見上ぐ

る並木に冬芽赤らめり  
一月のそら青くかがやき澄み析の並木の芽  
は赤らめり

冬木の中に生命は何を営むならん堅き芽は  
しずかに光りかがやけり  
堅き鱗片に包まれて一月の木の芽はすでに  
春を待望するか

すでに梅の一輪は開きたれど春は遠くして  
未だ風もなし  
生きてこの冬をつらぬかんのみむしろ春の  
来たるを思うべからず

冬芽のごとくしずかに耐ゆるべし黙するこ  
とも今はたたかいなり

冬芽△一九四四年▽

同時期のⅡの部の歌は、△子つばめ▽六首、  
△雁太郎▽二一首、△群馬山脈▽六首、△艦  
載機▽六首、△早春▽七首、△五分ノ二▽六  
首、すべて連作で、これらは戦時下の生活の  
記録でもある。△子つばめ▽は、そば濡れて  
じっと動かない巢立ったばかりの四羽の子つ  
ばめが、一夜明けて力づよく飛び立つさまを  
詠んでいる。間もなく生まれようとする秋山  
の子供への複雑な心理がうかがわれる。五体  
満足で生まれて元気に母乳を飲む子と母となっ  
た妻への思いを歌っている△雁太郎▽。疎開

させている妻と子を訪ね、平和な風景を詠ん  
だ△群馬山脈▽、病んでいる子と妻への歌△  
五分ノ二▽。△艦載機▽では、太平洋上から  
飛来する敵機に攻撃されるさまを時間の経過  
にしたがって一首づつ詠み緊迫した状況を表  
現している。△早春▽は硫黄島全滅の報道を  
聞いた衝撃が内容である。△雁太郎▽から五  
首を挙げておこう。

やわらき口唇に力あつめて乳房吸いつつ目  
は明けざりき

目鼻口手足そろえて生まれ来しこの赤き子  
に雁太郎と名づけむ

雁太郎はサイパン島に兵と人と全滅する日  
生まれ出でたり

雁太郎はすこやかに育つべしその子の母は  
すこやかに肥るべし

母となれる疲れの人は眠り覚めて子のかた  
わらに僅かに笑みつ

サイパン島の玉砕につづいて、硫黄島の全  
滅の報道は秋山に大きな衝撃をあたえた。

『短歌入門』の中で、「わたしは硫黄島の短  
歌をかいてから短歌をつくることをやめよう  
と考えるようになった。その時期、わたしの  
内部の絶望的な思いは短歌でもとても書けな  
いことがはつきりしてきたと思つたからであ

る。」と書いている。その短歌が△早春▽の  
連作である。同じモチーフで詩集『白い花』  
に「まひる」の詩がある。この詩については  
吉本隆明が「戦争中の現代詩」でとりあげ、  
戦時下の日本の現代詩を代表するにたりるだ  
けの出来ばえをもっている、と評価をあたえ  
ている作品である。今この短歌と詩を次に並  
記してみよう。

早春

向うが丘の雑木林はまっ白く芽吹きて春の

風速からんとす  
硫黄島はこの日通信を絶つ、三月二十日の

そら晴れにけり  
硫黄島は応答なしと正午の報道、続いて聞

こゆ「海征かば」の歌  
繰返し繰返し繰返す歌ごえ、硫黄島は黙し

て通信あらず  
陽は正午に在りてわが影短し、風は突風と

なりてわれを吹きまくる  
わが影の短きを路上に踏みて風の中に聞く

全滅のうたごえ  
早春の風は吹きつり吹きつる雑木林は  
大波のごとし

まひる

みがかれたようにはれた空の下を  
南風がはげしく吹きぬけてゆく。

白く芽立った雑木林の丘は  
大波のようにゆれている。

私は麦畑につづく道をおるいていた。  
ラジオの声が

風をついてひろがった。

三月二十日以後

硫黄島の味方は通信を絶つという。  
報道は二度くりかえされ

「海ゆかば」がそのあとにつづいた。  
海ゆかばのうたは

丘と麦畑にひびきわたった。  
さらさらと真ひるの太陽は

そらのまんなかにかがやき  
地におちてみじかい影となった。

私はそのうえに立った。  
硫黄島はすでに通信を絶つという。

今、私はこの二つの作品を読んで、むしろ  
短歌の方がより作者の心情のゆれが、直接に  
つたわって迫力を感じるのである。詩とくら

べて遜色があるとは考えられないと思うが、  
どうであろうか。

秋山は自作の短歌について、『短歌入門』  
の中で「わたしは、自分が書いたもののなか  
に、三十一字の上から下まで、すき間なく△  
短歌▽そのものが充滿しているような、それ  
ほど出来た短歌をただ一つも、もっていない。  
短歌といえども、そのことを成就するのは他  
の何ものにも劣らぬ大事業である。子供のと  
きからの慣れと親しみで、つい手すさびに終  
ることになってしまったのが、わたしの短歌  
とのかかわりあいである。」といっているが、  
連作△冬芽▽七首、△早春▽七首は戦時下に  
かかれた詩集『白い花』に収められた、「お  
やしらず」、「まひる」の詩と同様、戦争不  
同調の作品として、永く記憶にとどめられる  
べきすぐれた短歌である、その様に私は思う  
のである。

## 秋山清と乃木希典

千早 耿 一郎

秋山清が「詩人としての乃木大将」を『コ  
スモス』に載せたのは、一九四六年、すなわ  
ち敗戦の翌年のことである。この年に秋山清  
が乃木大将について書いた、ということとは、  
きわめて興味深いことである。陸軍大将乃木  
希典は、海軍の東郷元帥とともに、日本の軍  
国主義を代表する「軍神」であった。だから、  
戦後、乃木大将も東郷元帥も、教科書をはじ  
めすべてのものから抹殺されていた。この時  
代、乃木大将について肯定的に書くことは、  
一般にはそれほど簡単なことではなかったは  
ずである。

のちに（一九七〇年）出版された秋山清著  
『近代の漂白』では、右の文を「乃木希典」  
と題して、その巻頭に置いた。『近代の漂白』  
は、副題「わが詩人たち」。乃木希典のほか  
に、天田愚庵・野口雨情・鶴彬・伊藤和・植

村諦・和田久太郎・竹久夢二・石川啄木について書かれている。天田は歌人で僧侶、鶴は川柳作家、和田は俳句作家。うち鶴は特高の拷問により殺され、和田は獄中で自殺した。伊藤は農民詩人、植村はアナキスト詩人。野口・竹久・石川にしても、以上の人々と同様に「われをつらぬいて生きそして死んだ」という点でまさに詩人であった、というのが秋山清の考えであった。

ぼくが、秋山清の乃木希典に関する文章をはじめ読んでのは、『近代の漂白』においてであった。そして驚倒した。佐々木信綱作詞の唱歌「水師営の会見」を思いだす。

一九三二年の秋、ぼくは中国山東省・青島の日本人小学校の生徒として、修学旅行で大連・旅順に行った。水師営に行く道、馬車に揺られながら、みんなでこの歌を歌った。秋山清が「ふしぎにほのぼのとしたものの感ずべき何かがある」と言った歌である。「旅順開城約成りて敵の將軍ステッセル／乃木大將と会見の所はず、水師営……」

だが、水師営は、貧しい村であった。乞食が群れ、子供たちは、拾った銃弾の葉莢をわれわれに売りつけようとしていた。

東鶏冠山堡壘の頂上近くに、「コンドラテ

職を辞した。

三度目は、義和團事件に自分の師団から出兵した大隊の長が、分捕った銀を私有したかどで嫌疑を受けたとき。このときもかれは、みずから職を辞した。ほかにもかれは、上官と意見が合わないなどの理由で何度か辞職しないしはみずから休職している。そして、学習院の院長のとき、山鹿素行や吉田松陰の著書を教科書に使って、反発を招いた。

日露戦争で、第三軍の司令官として、旅順の攻撃をしたときのかれの戦法は、驚くほど拙劣であった。かつて、図上戦術で児玉源太郎と相対したとき、かれは、正面から攻めることしかせず、迂回して敵の弱点を衝く児玉の戦法にたちまち敗退した。旅順攻略戦のときも、かれはつねに真正面から攻撃した。敵の新しい武器・機関銃の威力をも無視した。樹のほとんど生えてない山の急斜面を、敵の機関銃の掃射を浴びて山麓から頂上に向かって突撃すればどうなるか、素人にも分かることである。塹壕を掘りつつ徐々に前進することを実行したのは、最後の攻撃地・二〇三高地においてであった。ここで、乃木の次男保典が戦死した。もうひとりの子である長男の勝典は、その半年前、南山の戦闘で戦死して

ンコ少将戦死の處」と書かれた石碑が立っていた。敵将のために記念碑を建てるということは、日本の軍隊がほとんど最後に示した武士道精神のあらわれだったにちがいない。「武士道とは死ぬことと見つけたり」という

「葉隠」の思想は、個性や人間感情を抹殺し、権力に絶対服従することであり、抗議なき死を最上とする。そのためには、激しい修行によって築きあげられた、スティックな精神の裏づけがなければならぬ。絶対服従しようとする人は少なくなかったが、きびしくスティックな精神性を身につけた人は、ほとんどいなかった。乃木希典も、若いころ、夜ごと遊興して歩いた。紅灯緑酒ときっぱり縁を絶つたのは、四十歳のときであった。なにがそうさせたのか知らない。西南戦争のとき、すなわち希典三十歳のとき、連隊長として軍旗を敵に奪われたときから、かれは自刃を考えていた、といわれるが、その頃軍旗がそれほど重要視されていたかどうか。むしろ、井上ひさしが『しみじみ日本・乃木大將』の人物に語らせているように、山県有朋や児玉源太郎が、これを機会に軍旗の神話をつくりあげようとした、というのが実情であったかもしれない。乃木が西南戦争で苦悩したのは、師・

いた。

二〇三高地を爾靈山と名付けたのは、乃木希典であった。「爾靈山」と題した七言絶句があるが、むしろ、「金州城外作」の方が、情感がこもっている。

山川草木転荒涼 十里風腥新戰場  
征馬不レ前人不レ語 金州城外立斜陽  
乃木希典は、短歌も作ったが、はじめは武士のたしなみの程度にすぎなかった。最晩年に井上通泰に師事してから、いちじるしく進歩した、と秋山は言う。

大そらのそぎたつきはみたひらけく青海原  
にさざ波もなし  
また――  
朝まだき武庫の河原に霧こめて駒のひづめの音のみぞする

日露戦争のとき、従軍記者としてずっと乃木希典に従って行動したスタンレー・ウォッシュバーンは、乃木について、かれは称賛に恬淡とし、むしろこれを厄介視したが、作詩の称賛には小児のように夢中になった、と書いている（『乃木大將と日本人』）。

玉木文之進、実弟・玉木正誼が、ともに「賊軍」に加わり、自刃ないし戦死をしたことによるのだろう。かれらから「賊軍」への加担を勧められながら、これに加わらず、かえってかれらを討つ立場になったことが、乃木の生涯の心の傷となった。

西南戦争のあった年の翌年、一八七八年に、日本陸軍における唯一のストライキである竹橋事件が起こった。暗黒裁判により五十三人の兵士が処刑された日、乃木が歌った七言絶句がある。

天意如レ有自悲傷 暗雨凄風欲断レ魂  
五十三城壯士 空得二反罪一上二刑場一  
「空しく反罪を得て刑場に上る」という結句にあらわれているものは、「この兵士どもの反乱に、当時中佐に昇進していた彼が理解と共感とをひそかにもっていたということではあるまいか」と秋山清は書いている。

乃木希典は、生涯に何度か挫折している。一度目は西南戦争のとき。二度目は台湾総督のとき。台湾では、行政官も「徳政」を布けと言ひ、みずから酒宴や贈与をことごとく斥けて、役人の反感を買った。また、英国の権益を排除しようとして、事を起こすことを好まぬ松方内閣と合わず、かくて乃木は総督の

が言われた。西南戦争で軍旗を失ったことを殉死の最大の要因とする考えは、すでに述べたように的を得ていない。乃木希典は、明治の資本主義確立の流れのなかで、「武士道がけつして後の軍人どもに受けつがれ得ないものとなってゆくその社会変化のなかに、おのれ一個は武士から軍人へ、武士道とともに生き延びたことを自信し、誤算した代表的人物であった」と秋山は書いている。そして、「明治天皇への殉死は、軍人どものアンチ武士道に我慢できない、かつての武士が為し得たはかない抵抗だったのではないか」と。

乃木希典は、絶対権力に対しきわめて忠実であった。秋山清は、いかなる権威をも認めなかった。その意味で秋山は、乃木と完全に相反する極点にいた。かれほど徹底して権威や栄誉や肩書きに近づこうとしなかった人は、多くない。かれは、第一生命のエレベーター・ボーイをしていたとき、支配人であった石坂泰三から、「大学を出てこの会社に勤めないか」と言われ、断った。「なにになりたいのか」と聞かれ、「なりたいたいものはありません」と答え、石坂を困惑させた（『わが大正』）。その秋山が書いている。「理想の追及に生き通して死ぬこそ詩人の生涯であると評価す

る私は、大将乃木希典をわが詩人の一人にかぞえることを躊躇しない」と。秋山と乃木とを結びつけるものは、まさにこの一点であった。人生の出発にあたり、人間と自由とを愛するアナキズムの詩人として、いかなる権威や権力にも屈しないで生きることが自分に課した秋山清は、その青春の理想を頑固なまで守りとおした。かれが戦争中に書いた作品をまとめた詩集『白い花』には、静かにはあるが、庶民の自由や生活を踏みにじる戦争に對するまぎれもない批判が語られている。たとえば「白い花」。

アツツの酷寒は

私らの想像のむこうにある。

アツツの悪天候は

私らの想像のさらにむこうにある。

ツンドラに

みじかい春がきて

草が萌え

ヒメエゾコザクラの花がさき

その五弁の白に見入って

妻と子や

故郷の思いを

君はひそめていた。

やがて十倍の敵に突入し

兵として

心のこりなくたたかいつくしたと

私はかたくそう思う。

君の名を誰もしらない。

私は十一月になって君のことを知った。

君の区民葬の日であった。

アリューシャン群島にあるアツツ島の守備隊が全滅したのは、一九四三年五月のこと。「皇軍」最初の「玉砕」であった。秋山清がこの作品を、『林業新聞』に発表したのはその翌年、一九四四年。月は分らないが、少なくとも戦争の終結した年の前年であった。同じ年に発表された「拍手」という作品がある。ニュース映画で、雷撃機が敵艦に向かって殺到する場面。

……

私の目は

その瞬間をみつめた。

突如館内はそうぜんたる賞賛の拍手に湧いた。

私は目を閉じた。

雷撃機は、海面すれすれに飛んで、敵艦の横腹を狙って魚雷を投入することを目的とする。みづから敵艦に突入することを目的とする特攻機とは異なるが、これが死と隣りあわ

せの行為であることはまちがいない。「私は目を閉じた」には、作者の万感の思いがこめられている。そして、若者を死地においやるものたちへの、また、それらに拍手する民衆の蒙昧さへの、どうしようもない憤りが。

「その筋」から十分にマークされていたにちがいない秋山清の、このような作品が、どうしてきびしい検閲の目をくぐり抜けたのか。この作品の、一見おだやかな語りくちのゆえに、検閲当局が作者の心のなかの激しい炎を讀みとることができなかったのか。

「戦争期に、庶民の抵抗があったとすれば、秋山がここに表現しているような隠微で、根強いところにはしかなかった」とは吉本隆明の言葉である（『白い花』解説「抵抗詩」）。吉本は、実証的にまた系統的に、戦争期の文学を検討し、「抵抗詩人と呼べるべき詩人は、金子光晴と秋山清のほかには、いない」と書いた（同前）。

その秋山清が乃木希典を「わが詩人の一人にかぞえることを躊躇しない」といった。そこにわたたくしは、秋山清のまぎれもない詩人の言葉を読む。